

J2.99:3

3 of 20

Sept. 1943

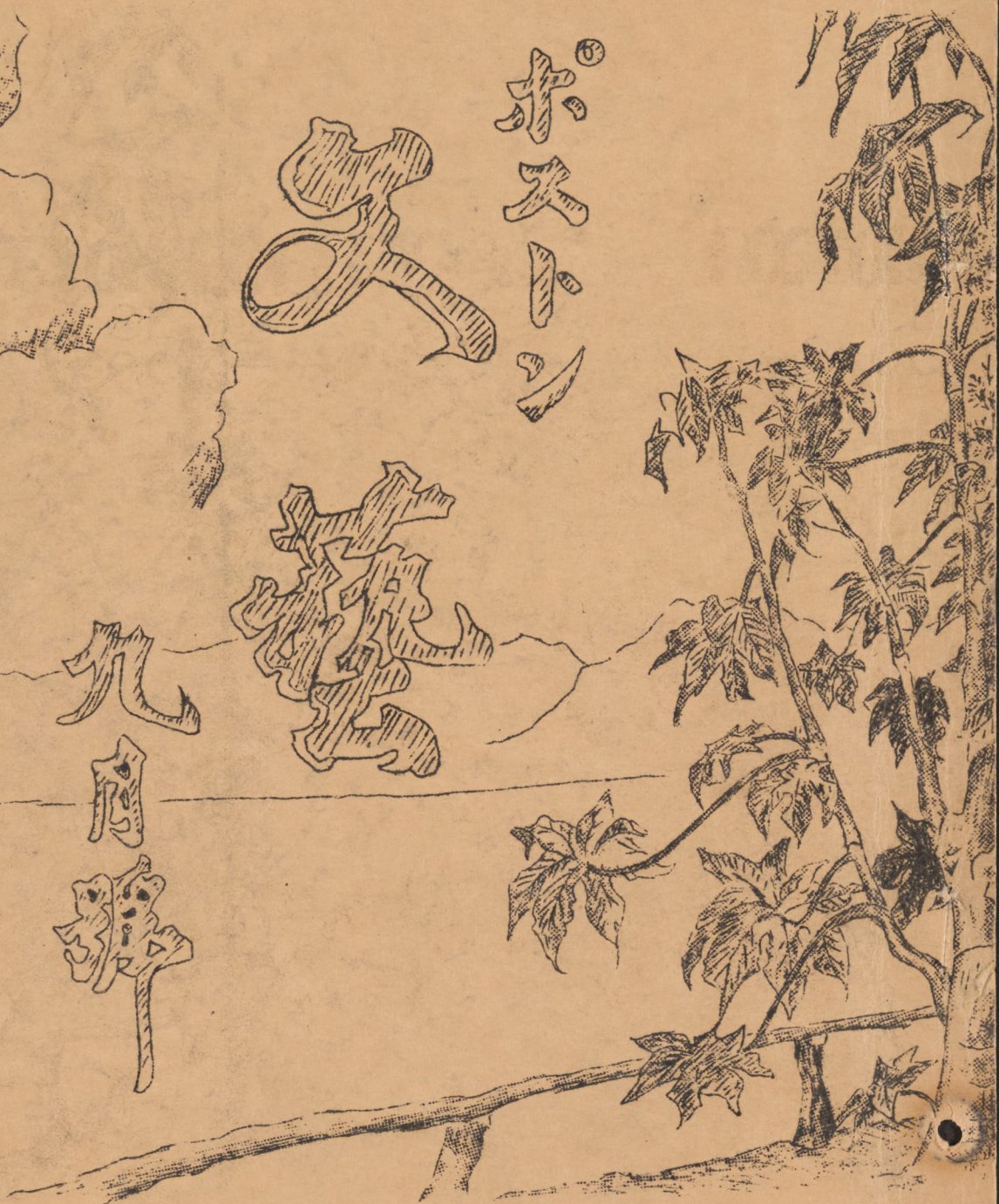
67/14
C

ホ
ス
ン

天

秋

九
月
半



ポストン文藝云一ヶ月の想出

石
原
慈
禎

十二月の七日！といへば永久に忘れることの出来ない日である。

この目をきつかけに、世界は擧げて動亂の渦中に投じられ、在留同胞も亦奇しき道を辿つて北に南に西に東にと恐れなく生涯に再び繰り返すこととなつてあらう境遇に置かれた。同胞は僅かな手廻品を携へて、所定の転住所にとそれ／＼移り住んだのである。又幾等か落着き、落着くに言ひながら、文化人としての不自由を感じて來た。就中讀むものがあつた生活はさびしいものであつた。大國民としての吾がはらかなる如くなる境遇に追ひ込まれても、悠々たる一面は失けなかつた。思想を詩化して自ら徒然を慰めると同時に進んでは自らの精進するものであつた。君子は剛時に喫緊の心思するを要し、道に精進すれば菜根譚の君子は剛時に喫緊の心思するを要し、然るに悠閑的趣味あるを要すと云ふ如く、誠心動靜ありの感を深むる爲めである。

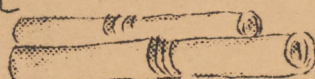
壹周年記念號



ポストン

文藝

九月號



ポストン文藝一周年の想出

石原慈禎

一周年の回顧

溪山

創立一周年記念祝詠

柳壇・能壇・祝吟

或日の西郷隆盛

外川明

英蒲花

胡仙

石川凡戈氏を送る

久留島房子

お別れ

石川凡戈

石川凡戈氏を送る

ポストン歌壇同人

石川凡戈川柳送別句

去るに臨みて・森すみ子

石磨き漫言・山本竹涼

詩

「断想」 樋江井良二

21. 19. 18. 17. 15. 13. 11. 9. 7. 5. 4. 3. 1.

修養

涼風閑話・團鏡寺

隨筆

赤星と

原とみ氏を送る

柳谷千代

ポストン歌壇

能句の概念

山中惺汀

ポストン俳壇

マンザナ吟社句抄

ヒラ吟社俳句搜抄

色紙の認め方 溪山

お別れに臨みて

富田虎山

ポストン柳壇

民謡

編輯室

57. 58. 51. 50. 48. 47. 45. 43. 41. 34. 33. 32. 29. 27.

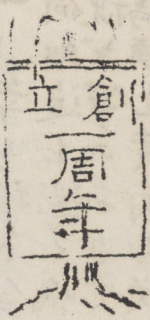


一周年の回顧

矢形溪山

ポストン転住地の荒野は今若葉の木蔭に子守唄を聞くと朗
かに変わった立退當時脛を汲した砂埃は坦々たる油道に化
して朝夕の散策にホムムウンと云ふ印象を植付けられる生
きである。人の心もそれと同様。併し此間の若しみと惱み
りめけて今日を克ち得た同胞の試練は永き歴史に残る尊
ものである。過去一年間ポストン文芸協会の仕事が多量なり
も斯ふした方面に役割を勉めたとすれば会員諸君の支援と
鞭撻の賜の何ものもない。富田虎山君はオハヨ州
石川凡々君は予期せぬ日本行となり、富田虎山君はオハヨ州
に出所して編輯部に大きな寂寥を感じて居る併し之も両君
の爲最善の道であり又時局の相であれば、只残れる吾々
境に善処することのみが與へられた責務である。虎山君の全
凡々君が本協会創立以來不屈不撓の努力、虎山君の全面的協
に對して諸君と共に感謝し、更に本会の持続に向つて支
れんことを切に希望する次第である。尚各転住地及所外
の文芸同好者諸君から受けた援助に對して本協会は深甚なる
謝意を表するものである。第二年の一步を印すると同時に
將來之を諸君の文芸發表機関として犬馬の勞を取らせて貰
たい。希望を陳して諸氏の恩顧に報いたいものである。貰

尤もこれ等は、矢形溪山氏等をはじめとして、同人相集つて
文藝協会を創め、そのものせるところを集録刊行せるものが
わがポストン文藝で、この誌を通して窺ひ得たのである。
春秋めぐりて茲にポストン文藝創刊号をものさしたる日を迎
ふるに當り、思へばこの誌によりて、どんなに慰安を與へら
れ、どんなに人々を喜ばせたことであらう？
尚又ものせろ人々にとりて、それが忘れ難き一時代であれ
ばあるだけ、この誌は永久に記念ともなり、又愛すべきもの
であらうことは多言を要しないことである。
しかし、溪山、凡次、虎山の諸氏が創刊号を世に送らるゝ頃
の苦心が一通りでなかつたことを最もよく知れるもの、一人
として、自分はこのまで書き続けて來て、筆を止めて當時を
靜に追想するであつた。それは丁度、ポストン佛教寺院
で昨夏、夏季学校を創めた頃、紙も鉛筆もなくあり合せを持
出して、手工用には各メスホルに頼みフルツの包紙を貰つ
て使つたが、全くこれと同様の不自由と苦心であつた。
自分文藝に疎いもので、投稿もせず、手傳もしないが、ポ
ストン文藝協会と想出多い因縁があるやうに思はれる。
想出多ければ記すことも亦多いが割愛して、今日のよき誌を育
漢山氏等同人諸氏が苦心に苦心を重ねて、今日のよき誌を育
て上げられた勞と、興へられた慰安とに多謝し、今後の寄與
と、発展を期待するものである。



俳壇及柳壇祝吟

何時しかも一年柳道まっしぐら
 育て甲斐沙漠に太き柳蔭
 一と年の證文献頭が下り
 儼然と柳は柵の中に伸び
 ポストンに柳史を飾る一頁
 一年の汗ポストンに見る柳
 健全な歩を見せて祝誕生柳
 酷熱も堪えて生きた川柳
 向上一過去一年の女記録柳
 汗と血で植えた柳が枝を張り
 一年の汗も嬉しい四疊半
 石柳植えて沙漠の一々年
 年の沙漠を飾る川柳
 こもあやな文華まぶしいまでの出来
 オアシスと仰ぐ文芸第二巻
 一年に斯うものびた柳の芽
 文誕を目出て川柳誇顔
 一々年育て眺める子の笑顔

ミニドカ
 サンタフェ
 全
 全
 全
 マンザナ
 全
 全
 全
 全
 デンソン
 ヒュースト
 全
 ツレーキ
 全

5
 山本 塩出 寄山 安武 龍川 仁熊 富田 紫田 野田 矢野 都野 上野 篠崎 山田 岡野 関野
 竹涼 大洲 白津 雀喜 定吉 巴水 楓水 烏城 露光 鏡水 兎氏 丘山 鈍突 白峯 如骨 亜洲 五松

創立一周年記念祝詠

わがこころ寄りどころ得たるもの、如し。ポスト文藝華絢爛なせる邊に

砂漠にも我文藝は崩え出で、早一歳を董りつゞけぬ

見玉奈哉
森すみ子

けはしかる世々がに居りても敷島の道ふみ辿る吾等幸あり

こゝ生して早や一年となりにけり花咲く今日は樂しかりける

赤星さと
土田親良

この花にもまして言葉の花一年にかほるポストン

上村比呂子

道もなき砂漠の中に文の道ひらゝて進む人に幸あれ

升谷千代

ありなれぬ收容所の生活を永に残すよすがとなるを思はむ

綾織謙介

移されし砂漠住ひの現実を文藝に綴りて永遠に傳へむ

野田夏泉

培ひて葉繁りしげき文草に人の精神の尊きをおもふ

島原潮風

エグート淋しく住ふ砂漠にて早一と五年を慰みぬる文藝

或日の西郷隆盛

外

川

明

想へば連敗の過去だ
月照にはすまん死に損ねの俺だ
だが勝とは何？ 負とは何？
そして生とは何？ 死とは何？
漸く解けて来た天と云ふ文字
骨にしみて有難くなつて来た
死んで来いと幾度か云つてくれた
無参禪師の冷くもあたかい言葉
芭蕉と蘇鉄の葉の香の漂ふ
大島の海辺の岩に腰を下して
足下の砂を凝視めてゐる吉之助
×
月光を身に浴びながら
壁の柱を背にして胡坐を組み
凡ゆる妄想を殺して無の三昧境から
何ものかを打開しようとする刹那
傍らの障子を開く音……
帰れ！

川柳の趣味に生きてる沙漠原
 文芸誌異彩を放つ二度の秋
 嬉しさは一ト歳経たる祝賀会
 百十度ペンにしたる汗の玉
 文芸は花なき里の錦なり
 其努力功遂に成り文芸誌
 文芸の蔭に滅私の汗を謝し
 日に月に繁るオアシスこ沙漠
 幹も葉も榮え沙漠の川柳
 素晴しい実のりへ汗を拭く笑顔
 ふろこばれ褒められてもう一年目

マンザイ俳句祝吟

丹精の跡あざやかに菊の花
 すこやかには育つ瓢々露の窓
 一と年を祝ぎ合ふ今日や菊の花
 何処追も響く鳴子のはれ音かな
 祝ぎ事のありて頼りに遠花火
 鶏頭も黄菊も咲きぬ貧ならず
 白樺を造る陽明るし菊の花

6

土屋村上山口
 山村下村
 岩田村
 木田村
 永安井
 天眠山
 聖山村
 牧村
 蘇村
 白嶺
 北湖
 翠畝

津村
 松谷
 堀内
 松岡
 進藤
 長谷川
 墨田
 森岡
 星野
 国次
 島原
 丁村
 緑泉
 狂雨
 青山
 舟水
 蒼逸
 生る
 枯木
 光葉
 睦子
 潮風



英蒲花

胡

全盛時代の英蒲の花の名所として知られた有名な所で、花の季節になると、

遠近から歌人・俳人がこの落を訪れたものであつた。ある年の春、西行法師は都へ上る路すがら突然とこの鼓が浦へ足を入れた。一面に咲き盛つてゐる英蒲花はさながら花毛氈を敷き、浦土の様だ。それが蹄形になつてゐる。入江を囲んでゐる所は、つめた絵にかいた様な絶景である。流石の西行も只だ恍惚とし、丸で感嘆の語を洩さざるを得なかつた。小半日を彼所と花の、中を徘徊して黄昏に近頃とある賤家に一夜の宿を求めた。濯ぎ湯を済ませて座敷へ通り、一日の疲れに横臥になつて馬燈をしながら、今観た鼓が浦の景色を、それに口を開いて、津の國の鼓が浦に來て見れば、

と詠んだ。西も東もその庭の片隅で釜の下へ焚火をしたが、にやぐと笑つてゐる十四五の乙女が、いさなり其男へ、五の此家の主らしい男が歸つて來た。乙女のお宿りよ、振り向いて、

胸にしがみついて、黒髪の中に狂ほしく泣く
純朴で野性的な島育ちの娘アイがナ
巨岩の如うな吉之助の全身を
ゆすぶる強烈な情熱の炎

x

x

江戸在住の折
先君に男子御出生の祈願の爲に
芝の神明宮に誓った一生涯女子不犯
その誓ひも破れてしまったのだぞ
アイがナ！俺が負けたのだぞ！
どうせ世捨人だ、死に損ねの俺だと
汝と共にこの島に朽ち果てればとて
何の惜しからぬ此の身
憶へば負け続けの俺だ
だがそれではか
漸く解けて来た
といふ言葉に
一切を委ねて生きてゐようぞ

(一九三八年 加州毎日新聞発表の旧稿)

石川凡才氏を送る

房 子

立つて行つた自由のない旅に立つて行つた。
 慌たしく五十有、余名の不安を含んだ決意とが時代の憂愁と、
 れを追ひ拂ふやうに、不安を含んだ決意とが時代の憂愁と、
 てゐた。余の慌たしき表現、行く人の心はない。
 も索莫としてゐる。何一つ表現、行く人の心はない。
 見送る人の心に

流れ出したおびたしい群集の後について。
 に続いた。カバードの心の中、若き人達の顔をおもひ動
 してゐた。その廻りには、人の心、思つてみた。霧、気、破つて
 車のモノタが、廻りには、人の心、思つてみた。霧、気、破つて
 平素の物静かさに、廻りには、人の心、思つてみた。霧、気、破つて
 に諧謔と萬歳を飛ばして、行つてしまつた。石川氏のことを
 想ひ出して、一年ばかり、仕事のこと、度々併し氏がかつてみたけ
 れ、此の一年ばかり、仕事のこと、度々併し氏がかつてみたけ
 田虎山氏と共に、文協を創立し、愛育して來て下さつた、お富

父へぞうか出家様は大抵風流の道を親まされから、此の花時に
わがくお出でになつたのであらう、
人はあれで歌を詠んでゐる積りか知ら、今頃けば父さん、津の國
の鼓が浦へ来て見れば、西も東もたんぽぽの花といつたよ、
之をうた西行は心の中稍穩でない、
ういふ風に詠むが浦へ来て見れば、
音にうた西も東もたんぽぽの花

と云ひますと答へた。
だばまだ充分でない。
音にうた西も東もたんぽぽの花
と云ひますと答へた。
だばまだ充分でない。
音にうた西も東もたんぽぽの花

之をうた西行は心の中稍穩でない、
つても臥ても居られな
西ア、自分で分る歌い
ら慢いてゐたのは、心愧し
事を遙に遠く、此の思ふと
を濡したとて、西行はこ
ない、と決した、
その夜の更けに、
荷物をは肩にした旅僧が
めたのは西行法師であつた。
と云ひますと答へた。
だばまだ充分でない。
音にうた西も東もたんぽぽの花
と云ひますと答へた。
だばまだ充分でない。
音にうた西も東もたんぽぽの花

別札

凡
才

夢にだつて想はなかつた。歸國通知突然に來る。サア大變だ！
友は云ふ。凡そに馬券が當つた。とおよそものゝ動かない。
凡そは、あるが、この時はかりは少々まごづいた。身にお暇をす
る。時と興へられず、慕しくして下つた。多くの方々にお暇をす
何卒皆々様お許しを願ひます。が、ポストンを癸ちました。
その時の私は、嬉しくもなし、悲しくもなしの心境で、筆舌に
は表はせないものでした。今誕生を迎へんとする文芸を愛
て往くのが、何よりも心寂しくあります。何卒皆々様協力の
私の遺児を育てあげて下さい。握手を受け、私は空気で癸ちま
した。段々とポストンを見えなくなつた。瞳がうるみ。
殺風景なポストンではあつたが、いざ去るとなれば思ひ出
の数々があつて、心の引きかかるものがある。これ人の情と申しま
せうか。途巾の青きに、キヤン、プ生活の忘れ、枝ぶりを
れば、自然力の偉大さに胸を打たれる。沙漠の大シヤボテンを見
案外自由な旅行で、木蔭に停車。十何ヶ月ぶりに、青草の上に

力は大きい。皆の心の糧となり、慰安となればそれでいいのだ。と言つてみられた。私の芸術に対する私の様に、生に道をし、情熱は、大きな壓迫となつて自分を苦悶させてゐるやうなものに取つては、そのまゝ受け容れろことには出来ないが、短歌会や川柳の会が多くなつて愛好者が多くなつてゆきつゝあることには人々にそれだけの慰安と喜びを育んでゆきつゝあることだ。氏の南洋に行つて、土人等の幸福と向上の爲に働いた。言つてみられた。何時も救済事業に興味を持つて、寂しい。悲しい人達の爲に涙を落してゐた。それとせう。人類の幸福の爲に必らず其目的にそつてゆかれることとせう。これは祝福しなればならぬ。併し、石川氏に行かれ、又後日は東へ向けて立たせた。後月の協行に取つか、くのであらうか、もう今日からでも九月の発行に頼みます。素人の船頭も出して、船を漕ぎ出す。さう。柳人の方等は、平和の暁には、勉強なやつて柳師を凌駕して、も出来ず、どうぞしつかり御勉強なやつて柳師を凌駕して、上げて下さい。

石川凡才氏を送りて

大和田の七つの海を越えゆかす君が航路に

長瀬 勇
児玉 奈越

短時日に急據旅装を整へて交換船へと友立ち行きぬ

赤星 さと

なづかしき日の本さして歸り行く行末永くさきくませ君

綾織 謙介

次々に去りゆく友を思ひつゝ淋しさ迫る初秋の宵

柳本 錦子

み母待つ御國をさしていゆく船の長さ旅路に恙あらずな

森 すみ子

まつさきに選らばれ歸へる凡才に恙あらずなと吾れは祈るなり

阿部 秋野

息をのみ声をひそめて幼な子等とんぼ捉ふる姿いとしも

升谷 千代

あひ知りて頼もし人と思ひたる君の歸國は悲しかり

矢形 けり

共に釣りし小川の土手に佇びみて夕蟬の声に君をし

時 文子

故里に向ふ車上に君のあり只黙々と目にて見送る

坐しピクニック気分を食を味ふ

ハイウエーはキャンピングと別な風が吹き

看板のビルへ喉がうなり出し

行くと程に珍らしく見る様に成り、農園に至れば戦前のわが姿が

思い出されて嬉しくなつて来る。二十五年は自由行動、第妹達に逢ひ旧友と久し振りの握手。

此処には旧知の方々が多く、バタリと出会ひて嬉しくなる。云

ふ男、福者に生れた様な氣になつてみる。思ひば凡そと云

したから戻ろ様な事はあろまい。生活と闘つて下さい、平和の

鐘がなる日も近きにあるませう。凡そは一足先に歸つて居り

ます。皆々様を御健闘を祈ります。と同時に何処の端に居りまし

ても皆々様の御健闘を祈ります。と同時に何処の端に居りまし

椰子の木の蔭から祈る友の幸

八月廿七日 ヒラ館府にて

またの日は胡坐で逢はう青疊綾織離平

お別れへ名残り尽せぬ茶がこぼれ安本時子

平和の目心に期して西東久能一路

道連と別れて廣い部屋に寝る山田如骨

きやり社で会はふ交換船の夢矢形斧つ朝山

ポストンの柳見返り斧つ朝山石川凡次

凡次に馬券當つた交換船

かねて日本行を希望して居た君も五月に取消してポストンに止る予定であつたのが・ツルル・心を決めて居たが其内何とか変化があるだらうとい

ふ期待を持つて居たのに是は又急転直下十萬の同胞の中か
ら相当の數に上る歸國希望者
があるのにラッキンバン
が君に當つたものである
文芸協会の創立者の一人とし
ての君の行を全會員挙つて壯
にしたいのは勢一パイである
けれど二日間のタイムでは却
て君の方げとなろのを恐れ甘
二日の夜川柳の知り顔だけ
君の暇を利用して四十六のメ
スに集つたもの廿六名・席題
の後で凡才先生の好きな詩吟
と衆勵節も同かされて其
の人の隱芸がつぎに出て平
生中々唄はぬ牧東次産業人虎
の諸先生の落語は例によつて堂に
胡仙の落語は例によつて堂に
入つたものであつた・別離の
悲みはあつても、君の前途を
祝福する朗かな送別であつた。



送 石川凡次氏

ポストン 川柳同人

交換船名編輯をせきた、せ
島原 潮風

共に飲む花月もあらふ新天地
鈴木 胡仙

また會ふ日まで
菅野 大海

幼稚園君の句調の跡が見え
稲垣 牧東

故國へ立つ友へ
川島 次彦

送別の辞に盛り
山西 里江

出奔へ庭木に注ぐ名残水
松谷 緑泉

出奔へ悲喜交々と胸迫り
津村 汀村

憧れの國へ旅立つ果報者
吉里 竜耳

寂しさを隠せぬまに送る今日
水畑 素人

師は國へ寂しく残る火曜会
宮田 千加貝女

師の恩の深さへ惜む宵の宴
稲垣 秋月

先生と名残り尽せぬお茶の会
渡辺 昭女

師の歸國前途を祝ふ句の集ひ
中本 かもめ

出奔へ支度が早い瞳を見張り
片山 幽香

凡次の歸國を祝す柳の友
中山 谷風

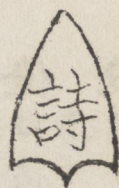
航海の無事を祈つて送別会
菅野 聖水

お別れの固い握手がみな語り
佐野 米生

石磨き漫言

山本竹涼

昨年四月三十日ビヤロツプへ收容されましてから六月の
 始めに元沙市國校長であつた中河氏がモンタナからキヤン
 へ歸られまして、其時モンタナの連中が皆石磨をして居る話
 且つ作品を見せて頂き、私も一つ磨いて見よ、と石を下さ
 一つ早速始めましたのが六月三日頃で、初めと正直に磨
 いた石のみ磨いて居ましたから、毎日の採り始めました人
 一の塊の土石から地球の年齢を考へたり、一片の化石から
 類の歴史を研究して、生物の競争、人類の自然と戦ふ、変遷の跡を水
 火の關ひするのには、科学者の競争、人類の自然と戦ふ、變遷の跡を水
 訪ねたりするのには、科学者の競争、人類の自然と戦ふ、變遷の跡を水
 の前には、枝を張り根を深く、更に幾万年かの後、石を程だつた
 木も何かの動機で、今茲に私の手に、這入つたのだと、命にでも觸
 又何かの理由で、今茲に私の手に、這入つたのだと、命にでも觸
 く懷かしみを深め、共の誠に、悠久な宇宙の生命にでも觸
 るやうな一種の不可思議な魅力が、單に石を磨く些細な事でも、吾
 私生活に何かの物や暗示されるやうな気が、起ります、或
 吾生活に何かの物や暗示されるやうな気が、起ります、或
 或る日には、採取に出かけ、元々から見付け、奇事もあつたり、人
 る時には、採取に出かけ、元々から見付け、奇事もあつたり、人



断想

樋江井 良二

苦しんで

失望して

結局自分は孤獨に歸つて來た

偽りの交際

偽りの仕事

偽りの生活

淋しい自分の生き方なんだ

東を向いても

西を振り返つても

人には各々の生活にこそがしい

愚かな女の饒舌

自惚強い男の議論

一人證になつて

音楽に心を傾けると

自分の心は孤獨の狩人だ

ても一人好い物を見付けて九人は骨折損と云ふ場合もあつて
其日其人にのみ限られた一つの運だとも云へまい。併し運
だとして寝て待つて居たのでは見付かりませんから根気強く採
取に出かける事であると感じました。
私はキヤンブに居る間石を磨く事を天職と心得ました日々健
康と幸福に浸りつゝ平和の来る日が一日も早かれと祈つてゐ
ます

石磨き何を訊いても生返事
か當時の私の全貌でした。
神津白子さんの私に寄せられた句に

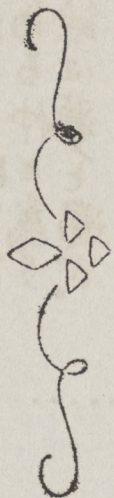
石磨き外に余念のない姿
石磨き覚へて趣味が又一つ
漬物の石にも別れ惜んで來
キヤンブ住子なき夫婦の石磨

白子
左 藤 枝
かつ子

一口新
青山

A、オーイ 君ー イサギユー 暑かぢやナカヤ
B、ホーナ事いね フテーカーツテなり どうした暑か事ぢやろかい
汗が音は立てゝ流れよろ
A、え 汗が出ると いゝ音がするもんかい 一体ドゲナ音がシヨとかい
B、これを見てんやい ポストン／＼落ちよろ

俺は遠い昔に見た女の様な気がする
やつぱり俺は彼女を憎めない
俺より三つ上の女
内気なその癖よく俺を叱ってくれた女
もう俺を訪れてくれない
距離は無限に果なく
時隔——愛情の幻は走るだけだ。



反省

秋山 シゲル

人は冷たい
大空は暗し
我が心更に暗し
只一人思出の野に行く

礫を蹴れば
たゞ虚なる声す
落葉の小徑を一人行く
足音の寂しさ

たゞわけもなく
涙の湧く

はらかなる森の彼方に
燈火あり
疲れし心
踏み越えし過去を
冷静に反省しよう

芸術は自慰だ！と誰か云った
さうだとすれば

芸術は何と

苦しい癒し難い自慰なんだろう

× × ×

間もなく自分はこのキャンプを去って行く

一つの尊い経験を握って

自分は自分の道を辿って行く

これでいいんだ
これでいいんだ

憎めない女

橋本京詩

愛情の幻は消えない
美しさを残し記憶のどこにも遠い故か

俺は彼女を憎めない

俺は彼女を憎めない
俺より遠く離れた女の様な気がする

あれから俺は彼女を一度だに
手紙を一度だに
くれな

コント素朴ナ便り

サニタ五

谷 無 聲

春モ未ダ浅イ某月某日、ホストンカラノ慰問文藝展
ヲ私達ノ下、病舎デ開クト言フ前ブレヲ、小池放送子
ガ齎ラシテ來タ。翌早朝カラ病床ノ間、間ノ壁ヘホストン
御夫人達ノ「タンセイ」ニ成ツタ水色デ麗洒十刺繍ノ額面ニ
松香ヤニノ麗筆ニヨル短歌、川柳、俳句ガ目醒メル者、如ク見事サ
デ飾リツケラレタ。午后一時カラ手輻デ押サレテ來ル者、松葉枕ノ
者、看護附ノ病友、ドレモコレモ鉛筆片手ニ頁ニ記シテ居ル。
七十名程ノ人達ニ混ツテ私モ拜見シタ。トリワケ私ノ眼ヲ或タハ
當テ南加桺壇ノ先輩デ常ニ指導的立場カラ日人諸君ヲ誘導シ
テ呉レタ溪山、凡オノ西兄ノ作品ヤ、出香夫人讓兄ノ俳句ヲ見出シ
夕時ノウレシサハ私ダケ知ツタ誇デアル。凡ソ識メテ居ても矢張り吾ハ話
タベ見た夢ノ懸念ノ便り待ツル。街チ切れぬ土産を夢ニ子ノ麻顔、溪山一切を
忘れ沙漠ノ朝ノ風ノ四作品ガ今モ尚私ノ川柳雜記帖ニ鮮カニ残
サレテ居ル。私達ハ文協ノ方々ノ致サレタ温イ慰問ノオ心持ラド
スケ感激シタカ知レナイ。其右私ハサニタフノ病舎ニ移サ
レタ数日後、皆サニ御馴染、大洲君ガ訪ネテ呉レ、相擁シテ、語
リモツキズ、話ハ其甥、白雀、鳥城、狂月、初郎、八角等ノ先輩ヘ
モ及ンダ。私ハ過去ノ思出ヲ一層和ヤカナ、朗カナモノニシテ悦ニ
デ居ル。病院生活デ一番愉シイフハ、旧友先輩ノ文藝作品
ト文信ニ読耽ツテ居ル時程例ヘ禄ノナイ、飲シイ時間デアル。

慰靈塔

24

土屋 天眼

肝に銘じて消へ難き
過にし歳の師走なる
月の七日の朝まだき
夢を破りし砲聲に

八十餘年の國交は
無慙に消へて敵味方
干戈交ゆる仲と爲り
既に半餘は夢と過ぎ

人類史上の悲劇たる
國と國との鬭争に
果を受けし同胞は
戰時制度の其の下に

轉住所にぞ移されつ
前途不安の柵の中
天変地災を氣に病みつ
送る遠世を憐なる

不如意勝なる生活に
心を千々に碎きては
積る苦惱の其の末に
遂に病魔に捕はれつ

幽明處を異にせる
血縁つながる同胞の
亡き魂の数づくは
異境の空に迷ふらん

曠野寂しく佇立せる
尸史に遺す記念たる
慰靈の塔の其の下に
靜に眼れとこしへに

千古に傳ふ慰靈塔
此處を淨土と思召し
佛陀の御慈悲に浴しつゝ
靜に眼れとこしへに

葬ッテヤッタデスが私ハ今病床ニ余病ヲ養ヒツツ感謝
シテ居ルヲハ川柳ヲ知ル道ニ違入ツタ爲ニ多クノ柳友ト知
已ヲ得、立派ナ作品ヲ各地吟句集ヤ文信デ學ビツツアル
現在ノ幸福感ヲ貴誌ノ一周年紀念号ヲ通ジテ感謝シタイ。
完

一九四三、八、二五



大いなる人となるの道は唯二つあるのみ
である。己れの小さきを悟るは其一つであ
る。己れの大きいなるを信ずるは他の一つである。
前者は情により後者は意による。
彼は授受門此れは折伏門。彼は易行道。是
彼は釈迦、基督の教義にして此れは奈破翁
は難行道である。
ニヤエの信條である。
人を脱して神となる。己れの小さきを悟る所以である。人のま
まにして神となる。己れの大きいなるを信ずる所以である。

高山樗牛

甲州惠林寺の快川和尚は「安禪必ずしも山川を用ひず
心頭を滅却すれば火も亦寒し」と喝破して火定に入られた。

話ハ脱レルが隣室ニ居ルKト言フ病友が手紙、代筆ヲ頼ニデ來
 ラ知已トナルニツレ十数本、代筆ヲシテヤツタ。其都度私
 此病友ハ氣が觸レテ居ルニカ思ヘナカツタト云フハ、私が代
 筆ニテ上ゲタ手紙、名宛が、母國軍政家、大官連ヤ財界名士、
 果テハ大統領ヤ國務官ヤガンヂー迄ノ姓名が混ツテ居ツタ
 ノデアル。ソレカラ或拂曉ノ事、醫師がK氏ノ腕ニ注射シ
 テ居ルヲガ心附イタ。フト正氣ニ歸ツタ彼氏ハ私ヲ呼ブ、病
 床ニ顔ヲヤルト、一ツノ小函ヲ指シ私ニ呉レルト云フ。遂ニ彼K氏ハ
 其朝四時頃逝ツタノデアル。次、日ドクターヤ、病友ト立合ヒテ私へ
 呉レタ遺品小函ヲ開クト。過去私が代筆シテ上ゲタ十数本ノ書函
 ト彼氏ノ遺言トが現ハレタ。即チ彼K氏ハ、在米四十年孤独ノ流轉
 ノ旅ヲ續ケ近親モナク、又知人スヲ持タヌ寂シイ生活ヲシテ來タ
 檢査台インクニ一生活へ逐ヒ込マレ、引續キ病院生活ヲシテ居ル
 ニ、各寮友ヤ、病友連へ來ル手紙……又送金告知証ヲ事務員
 が還シテ來ルノヲ見ルト、ウラヤマシサト、寂漠トデ氣モ心モイ
 ラ立ッ様ニタギリ切りマシタ。心ノ平靜ヲ保ツツが出來ナカツタ
 ノデ遂ニ貴下様ニ色々手紙ノ代筆ヲ頼ミマシタ。其手紙ヲセ
 メテモ、心遣リニシテ毎日毎夜繰返シ引返シ何回トナク素読シ
 テ居ル裡ニ私自身ヲ受信人ニシタリ。受信人ニシタリシテ慰ニタ
 ト云フ者ノ心境ヲ想ツテヤツテ被下イト書遣シテアツタノデス。
 ハ此ハ病友K氏ヲ慰ルト余リニモ氣ノ毒ナ過去ニ次ケマズニハ
 ラレナカツタノデス。此ノ小函ヲ靈前ニ飾リ、香煙読經ノ後



京風閑話

圓鏡寺

二千噸、三千噸の汽船を見て、目を丸くして驚いた一八八〇年頃の話である。横浜を出帆したシャートル航路に、異彩を放つ乗客が、吾こそ洋行をするのであると、胸を張って陣取つて居た。それは、目附の険しいトムソンと名乗る白人に、引率されたカ士が二人に、彫刻家が一人、藝者が四人の一行八人である。ナヨン醫のオキ、ベロノくした日本着物の藝者の姿には、しかに異彩があつたであらう。

航海中、海は相當に荒れて、沙港入港が予定より三日遅れたと言ふのであるから、難航であつた。真先に青くなつて酔したのは、身体のデブカイカ士の松田空吉であつた。カ士と云つてもやつとナヨン醫が頭に付いただけの、禪擔ぎにすぎないが、洋行の意気込みも消えてしまひ、青くなつて生きた心地もなく船室に寝た切りでやつとの思ひで、沙港に入港したその折には、体重が五貫目も減つてゐたのだから大変であつたらうと思はれる。こゝした、思ひもしなかつた難航で、苦しい思ひをしたものの、沙港上陸と共に彼等一行の異彩は益々珍らしがり家のアメリカ人の目を惹いたのは無理もないが、彼等はそれが得意であつた。

○夫れ學子は人に下ることを學ぶものなり

人の父たる事を學ばずして子たる事を學び 師たる事を學ばずして弟子たることを學ぶ。

○能く人の子たるものは能く人の父となる。

○能く人の弟子たるものは能く人の師となる。

自ら高ふするにあらずして人より推して尊ぶなり。

中 江藤樹先生

薪を擔ふて翠岑を下る

翠岑道平ならず

時に憩ふ老松の下

靜に聞く春禽の聲

良 寛

人の修養は△形であるべきで少し其頭を世の中に

出して根の張つたものを隠してをるべきである。

(これが反対に二角が上になつてはならぬけれど)

高 島 平 三 郎

引受けてくれたのである。一行の中で、由士の松田空吉だけは、
どうしても日本へ帰らうとしなかつた。それは無理もない事で
先の航海でコリ／＼してゐるのだから領ける。

どこへを、どうして歸つたものか。空吉は再び沙港にその
姿があつた。多勢一八八九年頃であらう。その頃には空吉は

力士の空當ではなく、どこで習つたものか、当時の西洋相撲でカチカチ
リゴローマンといふ長なうしろの相撲を習得し、力量があるのだ。
キ」と名聲を拍し、空吉などと云ふ者は一人もなく、アキ

ツプ（鉄のぢやア）と綽名され、恐れられるほどの人氣があり、收
め、念りを並べて飛込んで来た。なほしろ一勝負、平帯、二千
の賭をするほどあるから、事として、恐ろしい勢であつた

ろうと思はれる。儲けた金を持って、日本に歸つて来たならは
相撲でも、成金で旦那様で暮せたいものに、慾に目かくれた空吉
は、儲けた上に、儲けやうとしたのが運のつき、或る勝負で足

を折つたのを最後は、空吉の姿は、やがて沙港にゐる事が出来な
かつた。アイダホ州に近い山村で彼が最後の息を引き取つたといふ
ことをそれから五十年後に、沙港の人々が聞いふと云ふ。

この物語りは事と誤であり、当時沙港に居住してゐた人々の耳には
アキオ、ジャツアの名が残つてゐると傳へる。筆者はこの物語りを
筆者と團棋の好敵手として六十年のバイオニアより聞いたまゝを

記したのである。筆者よ、この物語りの中に何か感ずるか。それ
は筆者の自由であるが、あまき奇しき、空吉の一名に筆者は、或もの
を感じ、筆を止めたのである。

だから面白い沙港と云つても、当時の沙港は、幾橋もなせられ、なに

も無いインディアン達の漁業港で、一貧弱な漁村にすぎなかつた。

その實、トムソンなるものは、この珍らしいグリ屋の、アメリカ人の

氣持を狙つて一儲けしやうとして、遠い日本まで渡り、力士

や藝者や彫刻家に、さも洋行させてやり、金儲けもさせて

やるとの計畫で、ひつぱつて東の大山崎であつたので、人目を惹く

のを幸ひに、力士には、角力をとらせ、藝者には三味線を弾かせ、舞

はせ、彫刻をさせて、まあ、見世物として、沙港を振出しに、仲々

収入も多く、ほく／＼有て、巡業を續けたのである。

ところが、時が過ぎるにつれて、あれほど珍らしいが、れた一行

も、次第に、人々から観望られなくなる、回がやつて来た。トムソン

は、太平洋沿岸の巡業を打ち切つて、ニューヨーク、シカゴ方面へと

旅をつゞけることにしたのであるが、まゝに大變な出来事が、起つて

しまった。それは、赤字々々の巡業で、シカゴまで一行が来た或る日、

トムソンは、経営困難と見てか、山師の本姓を顯して、忽然と

、資金を消してしまつたのである。

さあ大變な事である。英語の訳らない取残された彼等、七人

は、途方に暮れてしまひ、所有して居た金も、次第になくなる。

食糧は、それなると口惜しんで見ても、致し方もなかつた。

最後の手段は、日本領事館に泣き付くより方法がなかつた。領事

館も、困つてしまつたらしかつたが、それでも、日本人の事でもあるし

特種な者達ばかりであるので、彼等を日本へ送り歸す事を

翌日いろいろとエ面々手入れをしたがどうも甘く行かない。長女が見兼ねて、一本オーダーしてくれたので、大事にさしてゐる。其うち、シカゴから次女が一本送ったので都合三本になったがそれでも、こゝはボストンだから折れたのも、メスホール通ひに使つてゐる。昨日も丁度雨降りだったので間に合った。こゝはボストンですよ。と云つてくれた。とみちやんは四五日前に、ミレガンの病院に看護婦の勤務に行つた。私は彼の健康と前途を祝して止まないものである。

歌友 原とみ姉を送りて

榊谷 千代

原さんは去る廿三日、ボストンをお立ちになりました。歌友であり信仰のよき友である姉と、お別れした後は実に淋しい。昨今であります。原さんを識つたのは、私が信仰の上の事で非常に苦しんでゐた時でした。元氣な原さんは「あんたは自分氣が小さいとか勇氣がないとかいふが、悪い方面では随分勇氣があるではないか」と云はれました。と同時に天来の声である。と深く感激致しました。文藝誌に紹介して下さつたのも原さんで短歌の書籍やら書拔やら種々と援助を受けました。傳道の方面に、病者のお世話に立派な人格者としての働きを末長く私の記憶に留め、卒直で諸議に富んだ原さんをボストンから失ふた事は私の大きな損失であります。原御夫婦の前送を幸ならん事を祈り併せて既往の懇情に感謝の意を表しておきます。

隨筆

洋傘

赤星さと

ポストンはアンブレラの流行が盛である。誰も彼も可なり娘さんから若い奥さん、お母さん方、お祖母さん方が色とりどりの洋傘を真夏の炎天の、往き来に見受けるのである。色合は赤、黄、緑、ブルー、ブラック好き、の色々好き、の形である。殊に午後の暑い時には、出来るだけ高くさすと日光をさける許りもなく、風を通して氣持がよい。又ポストンの町を美化し目賑はす役割もするのである。私の内にたつた一本の洋傘があった。私は教会に學校に、或は病院に或は友人訪問に又はキャンテンに、月一回の和歌の会にもさして行くのである。何時も使ふので色は得せ其エ記だらけになつた。柄はどうしても一本、買はねばならぬと思ひながらも、高いとの事で延びくになつてゐた。と或日キャンテンに行つたら、アンブレラの切れ地があつたので、一弗三三仙で買った。形を切り、夜遅くまでからつて漸く出来上つた私は、獨り言を「おかしな」とクルクル廻して居ると、そこに居合せたとみちやんが、叔母さん「ポストンですよ」と勵ましてくれたので、私も「そうだ」と思った。そして其翌日から、平氣でさして居るつもりであるが、何だか氣になる。

又日、病院から歸りに三十六のあたりで、俄に旋風に襲はれ、私の洋傘は、ベチャンコになつた其上、骨が一本折れた。隨分こわかつた後で、命拾ひをしたと思つた。

第十二回歌會詠草集

八月廿九日催ス

順序不同

赤星 さと

澄み渡る朝のしづけき大空をつばさすがいさぎの群れ行く
暑さをも忘れずばん歌の道一句たりとも おろそかにせど
友はつゝに旅立ちゆけり自願車一の燈見えなくなるまで佇ちながめをり

升岩 千代

むし暑きこの短夜を蚊の群のおもひまきりてゐねがたくすも
もの深く究めむとすれ善し悪しは糾へる縄の如極めがたしも
生ひ立ちも言葉もたがふ親子なり子は沢に有れどなきが如し

大沢 深泉

別れては又何時逢はむ親娘こそ人目ばかりて袖ぬらす母
渡来せし父の時代を想ひつゝ吾れははげまんモハベの館府に

長谷川 蒼逸

おひなべて黄昏ふかき色なれど重なる峰は鮮やかに見ゆ
曉は今でさへよー戦のすみでの後の朝ぞ待たる人

内堀 山人

頂は雪に真白きロッキの麓につぐ来夢の穂の波(コロラド州にて)
顔よりいたる汗も拭きやらす大根周引きす吾は忙しく
晝もなほ暗き喬樹の蔭によりポストン文藝くらほしむ

文藝協會 創立一周年を迎へて

永瀬 勇

虎山行き凡才も去にし文壇に尚ほ溪山ありよろこばざらめや

安高 きち

ちからなき身の術もなく人のためなすなく早くも一年はす

年を泳みつぎし人のあとみればこの歌会も空しくはあらす

貴家 しま子

文藝誌この地に生れひととせのけかを迎へぬ意義あかき哉

歌がたり

入所 當時

柳本 錦子

サボテンのひろ野ひと條の道ありてわが来るべの着くはいつちぞ

黒き家棟^{やむね} 建ち並び居り今日よりとわが住む里か青草もなし

日を連ねこゝに入り来るはらからの愁心はひとつむつみゆかまし

旋風にうづ巻昇る砂けむり^{ほのほ} 炎の如し舞ひ移りつゝ

逐はれ来し砂漠の月のさやけさや人の愁心は言はずもあらむ

大原流葉

メロン積むトろク行けり甘き香を日向の道にたいよはせつつ
山の端に雨しきりなり黒雲の屏風なし立つが稻妻に映ゆ
心地よく雨にしめりし道端に小石 洗はれてすがやかなあり

柳 本 錦一子

夕空はほのかに澄みて日の墜ちししげがほどの色のすがしき
曇空雨とはなりて洗はる 諸本のみどりよみがへるなり
胸深くひそむ思ひにこの頃を満たざるものありなごまず

西 本

こもともと風にさゆらぐ朝顔の葉がうれに赤き一輪の花
風立ち高く上りし灰塵はさながら火事の煙とも見ゆ

土 田 親 良

この夜半の暑さきびしくうつそ身のいねはかねるに空に白くみえぬ
高橋 東 民

たをや女の眉にも似たる新月の光りかそけき夏のたそがれ
時の世に傷める心いだきつつ 不遇に逝きし友を哀れむ

上 村 ひろ子

物を問ふ吾子の瞳の曇りなく一途^{いちだ}なるをし見ればたうとし
貴家しま子

次々に掟変りつつあすの日のわかぬ生活に今日もくれば
悉く我を頼りしいとし子の大人さびきて隔てあらんとす
結び目を忘れし心を来々と縫へるに似たるけさのいらだち

来たなりに幾年たつも古里の十五夜所へる月はなつかし。

綾織謙介

わがことの終れる如く大木輪に総りて庭に日向葵立てり。
堀川の夕日に映ゆる水際辺に釣をし垂れて児等みならべり。
さ庭べの榆の若木の伸びしるく小蟬宿りて鳴く日の續く。

古林 すみ子

大きなつぎのあたれる靴下をはきためらはぬ夫となりけり。
朝々を鏡にうつすわが髪よここの暑さに赤くなりぬる。

北村 ゆきゑ

不味くとも神の恵みと感謝せば日々の食事も樂いかるべし。
ありがたき法話をきくと今更に己が不孝の罪を悔ゆるも。

清時 文子

子等ゆきてとみに家内の淋しかり歌も聞えず口笛もせず。
世の常の母にてありき我も亦子を旅立たせもの思ひすも。

林 君江

志立てり市俄古に出でてゆく清き乙女にさはりあらずな。
児玉なを

待ちまけし夕立雨は蜀黍の穂の上に觸り降り過ぎにけり。
こもり居のこころを温めよ真昼間を稀に聞きつる蟬の鳴き声。
樂譜の上を指して叩き温習する吾娘の所作のあわれれを見ゆ。

みもと
三十七年を 生業に追はれ来し吾の身に歌詠むゆより今得たりけり
吉田晴江

安高きち

大通り歩む暑さに堪へかねて家かげつたひ歸へり来にけり
今朝話けしカトリリーの葉をざる涼しさに身もよみがへり来ぬ
永瀬 勇力

すこやかに吾がうつそ身はたもち得て盆の踊りにまたもあへるかも
ひとびとは今日の暑さにへこたれてつひに歌会も怠るおほし

後記

ものでホストンに文藝協会が結成されてから既に今日其の
一周年を迎へる事になりました。撓まざる諸君の努力の結果
日に増し月を追ふて隆盛になつてゆく。ホ文の進展振りを喜
ぶと共に尚ほ今後にも一層諸君の脚奮闘を切望して止まない
者であります。

長らく選歌を受持つて頂いてゐた安高さんが昨今微恙で在ら
せられるとか、尚其上大切な眼鏡を紛失された爲めどうしても
今月は選歌の方のお骨折りをお願いする事が適はぬ由で以
前からのゆきがかり上、又小生に其の役目を言ひ附かつた訳
であります。既に皆さんも御承知の如く至つて末熟な小生の選
です。其處には多分に不完全な点があると思ひますが、前承

宮村一雄

大なる試練の筈堪へゆかむ感激の日を胸に描きつつ
 なぎてけはみしづかに黄昏るゝ裏畑の辺に二ほろぎの啼く

着き日も書かきをればたちまちに日暮ちかまり 蛸のなく
 柴田よし

山岩 永千代

今日の雨しづかにふれば久々に心和みて物思ひをり
 戦場を思へばこの暑さにも堪へつゝ 日々の業をはげますむ

池田 愛子

年老ひし祖母上おきてはるばると吾れは再びアメリカにまぬ
 海原を真赤に染めて今日の陽も沈みゆかむとす 津つ波間に

望月 みどり

たは易く他人になじまぬ性もちき今日も孤独の寂きに居り
 群星と背きて落ちし星一つさびしかりけり 我にかも似る

阿部 秋野

漸くに捉へたるかや姫とんぼ小躍りしつゝ孫の走りまふ
 蚊にさされおむりかね居る枕辺に声ひやかせてこほろぎの啼く

森岡 祐木

囚れて縄目のうちに忍ぶとも矜持たもつべしすめらくにたみ

島原 潮風

の言はば涙落つべしひたに堪へて吾子が首途を黙し送りぬ

俳句の概念

山中俚汀講述

○最後に俳句は詩であります

俳句は詩であるといふことは或は矛盾した言葉かも知れませ

ん。と言ふのは私は最初に俳句は文藝であると申しました。

処が總べての文藝には必ず詩があるの御座います。俳句が

文藝である以上、それに詩があるのは當然であるからであります。

而し私が特に俳句は詩であると申し上げる所以のものは、

俳句は他の文藝に比して甚だ短い形のものであり乍ら、尚且つ

何等の遜色なきは即ち詩に最も重きをおくからであります。

之詩こそ俳句の全生命であり魂であると言ふても良い程

重要性を帯びてゐるからであります。

では一体詩とはどんなもので有るかと申しますと、これは

誠に抽象的な言葉であります。一口に説明し難いので有りま

すが、強いて申上げますならば、ある俳句なら俳句、その作

ら受ける所のあるもの、即ちその作品を味ふことに依つて、

心を培ひ、心の糧となるものとも申しますか、而し斯んを説明

は皆さん方にしつくりせないかも知れませんが、一つ例を挙げ

お話致します。今私は夕焼といふ題で句を作ります。

美しき夕焼空でありにけり

假に先づこんな句を作つたと致しまして、これを一つ味つて見ま

せう。この句意は説明するまでもなく、その通りで、空が美

の様な訳ですから先づ皆さんの御諒解を願つて置き度いと思ひます。

選歌は出来るだけ原作のまゝを發表する様つとめました。それで中には非才な私には解りかねる様な作もありました。例が、さういふものは解らぬまゝのものとして發表しました。例へば、峯景氏の「連三首の歌」など、その類で三首とも仲々六ヶ敷いものばかりでした。此處には其の初めの第一首を發表させて頂きました。

尚ほ先日、歌会席上で或る作家から質問のありました「釣をし垂れて兎等居並べり」の「釣をし垂れて」の用法ですが、あれはあの時も申し上げました如く、別に間違つた用法ではないと思ひます。もつとも質問の時、釣るは動作であつてそれを垂れてと言ふのは何うかと言はれた貴方の其の言葉も肯けるのですが、あの歌の場合、釣をであつて釣るのではないのですから、これは動詞ではなく、名詞でせう。同じ時に例歌として申し上げた子規の歌を参考の爲め左に照会して置きます。

釣垂れて魚餌につかず蜻蛉かげろうのとまりては飛ぶ河骨の花
子規

「も早く安高氏の御快癒あらん事を祈念しつつ此の鈍筆」

欄く次才であります
九、三、記ス

永瀬生

ポストン俳壇

四季雜詠

和氣湖月編

ポストン文藝一周年を祝して

一ト年をなれて吾が庵鴉高音

和氣湖月



吉田竜耳

新涼の校舎は青く塗られたり
秋晴れや糸瓜の花に蜂雀
素裸で小溝に泳ぐ土人の子
水引きの水集りて湖の如し
錆びはせしソラタありぬ草いされ
牛の如く土人媼の耕せり
ドべの家に鶏放ち飼ひ棉の花
道の辺に竈ぐ土人のソーダ水
鹿の皮壁に干枯び土人小屋

関野五松

再轉の噂とりぐ秋に入る
新涼の朝の炊煙ののぼり立つ
哨兵の銃の光りや油でり
告示板貼り盡されて夏暮るる
窓下に藜二た幹伸び競ふ
行くほどに経狭はまりて夏本立
日覆の破水繕ふ残暑かな
交換の帰國の友に秋晴るる
噴水に虹現はれし夕かな

五十位静遊

しく夕焼してゐた。たいそれだけで、これは事實の報告以上出づる
 何物も無いのでありまして、なあんだ変哲もないと誰しも
 思ふことでございます。その何の変哲も無いと言ふのは即
 ち詩が無いからで有ります。御覽の通りこの句は五七五の
 三節十七字であり夕焼といふ季題も詠み込んで居りまして
 完全に俳句の形態は成して居りますが惜むらくは、その魂で
 ある詩が欠けて居ります。故に俳句として落第と言ふ外は
 ないのであります。題で先日の場合に誰方かの句に

夕焼や突元としてヒラの山

といふのがありました。作者には失禮な申分ではあります
 がこの句がそれ程勝れてゐる訳ではありません。たゞ詩の説
 明上引例したに過ぎないのであります。でこの句を味つて見
 ませう。

このアリゾナの天文は他の地方で見られぬ鮮かな素晴らしい
 ものであることは、皆様よく御存知のことです。殊に
 当ヒラの夕焼はその代表的のものと言ふて差支へないと思
 います。その素晴らしい夕焼空を背景として突元とした
 ヒラの岩山が横たはつてゐる様を睨つてじつと想像します時
 これは實に一幅の油繪であります。この一幅の油繪と感ずる
 ことが即ち詩であります。故にこの句にはその分量の多
 少なを別として詩の存在を認める。即ち俳句であると言ひ得る
 ので御座います。

マンザナ吟社例會句抄 八二五

題「盆の月」

「残暑」席題「墓参」

岩下蘇村

墓参すや哨兵柵に銃を疑し
弾ける飛ぶ鳳仙の実や秋暑き
盆の月こゝにしづまる慰霊塔

木村白山領

高原に閑か込められて残暑かな
審問の順を待つ身や秋暑し
教言戒の解かれて今日の墓参かな

木村山一空

身寄なき配所の墓や盆の月
生れおごん子に物縫ふや残暑妻

「惣故秋洋君」

君は今億土の旅か盆の月

安田北湖

セージ野になびく香煙墓参り

傾きし友の墓標を拝みけり
奈据えて暫し息づく残暑かな

永井羽幸次

ゆるやかな京音頭取盆の月
かざしゆく造花の葉や墓参り
暮れてゆくべしの人や秋暑し

山口牧村

挽が、残るトメト熟れたる残暑かな
あたとせの配所住長や盆の月
大せらは晴々つれ立つ墓参り

山崎玻璃子

慰霊塔に捧ぐる流経秋暑し
盆の月めでつく吾娘とそこらまで
山肌雲影黒き残暑かな

石井千鳥

佗び住ひ明日はいつこ盆の月
慰霊塔工事成りたる墓参かな
草の穂のいつしか実り秋暑し

噴水のしぶきを避けて仰めり

噴水のしぶき変はりし夕べかな

噴水の止みて叫ぶる鯉救多

噴水に寄り来る人や夕餉終へ

病院にて 赤星八郎

笑かに笑みて見舞の友来る

まどろみしレガゴの吾娘や夏深し

モハベ誌八月号 校梓 五十位 静遊

釣の友今日は遅れて来りけり

今日も亦小鯉ばかりや良く釣れる

安井乳海

躓きて飛び上りたる跣足かな

冷奴喉なだらかに下りけり

篠田香虎

菜園に一筋残る胡麻の花

童の逃ぐる背中に天瓜粉

安川不似郎

炎天の埃程や旋毛風

沈む日にあがる埃や撒水車

小田 華水

講堂の大電燈や 夏の虫

その下につぶら重なるトマトかな

小島 生

會釋して過ぎし女の日傘かな

姉よりも妹の脊高き日傘かな

青木 落葉

夏窓に瓢も一つ下り居り

汗ばみし髪も洗つて扇風

俳人となりすまゐたる登山かな

夏草の中に埋れる道しる

山 北 凉水

蒼空へ蝶巻かれ行く旋毛風

夏朝や練り齒みがきの心地よき

山 根 愚公

扇風器や初衣仕立てる若き妻

打水に流れ終ふせり 蟻地獄

和 氣 湖月

空ろなるモハベ巖山炎天下

襪多き巖山にして泉なし

沙漠より仰ぐ巖山瀧欲しく

巖山の暮色伴ふ端花かな

三伏の巖山白き雲を吐く



兼題

西瓜

蟻

日傘

ヒラ吟社俳句抜抄

山中俚言

大蟻のいとなむ庭に日燦々

巨タニク洩れ噴く水や旱雲

津村木洋

槽の梯子よづ人雲の峰

驟然と永永に風あり夕立雲

奥野吼雲主

午後のバエクの静けさを走る蟻の道

西瓜一所に落さじとシローまた上りて

柳井銀鳥

バエクや蟬踏み灯を取りに

吉良比呂武

大蟻のつまめば草に咬みつぎぬ

瓜西瓜うまし逆ふ心なく

山中利子

星多くなりしと思ふ端居かな

佇みて日傘の紅の映ゆる頬

佐藤一棒

踏み見る蟬の骸へ蟻の道

水タニク洩りぬ蟬なく丘の上

石原規代

向日葵の蟬にわらべのしのびよる

久保田緑朗

蟻の道今朝もすじ庭を掃く

板橋志子

葉木の西瓜あらはとなりけり

高井勇藏

引水を飛び越えて渡る日傘かな

大坪正巳

店用を待つ人並の日傘のな

池田佐保子

習字校に誘ひ合せて日傘の銀

石原清光

撒水に絶えしもしばし蟻の道

田名ともゑ

もろこの昔木のさゆらぎ涼台

藤井丸鹿

汗ふいて荷車に道をゆづりけり

村上 聖山

セラ裾野岩もあらはに残暑かな
静かなる雨雲の流れや秋暑し
音頭の郷音くキャンアや盆の月

土屋 天民

しみぐと偶ぶ故郷や盆の月
小流れの圓れて音なき残暑かな
七き母の頬りに恋し盆の月

池 永肥州

秋暑し配給急ぐ食料車
供花なき無縁塚にも合掌す

田 中素風

秋暑き慰霊の塔にぬがづけり
軒の蔭迄ふて憩へる残暑かな

望 月奇風

左参日の善男善女群がれる
法要の野外式場 盆の月

課題「朝顔」

永井 翠歌選

入選

こつくと老の木細工牽牛花 北湖
軒下に朝顔さかせ置床几 蘇村
朝顔に煤がかいれり風少し 千鳥
朝顔やセラに残人の月白し 聖山
下りたてば早や朝顔の三輪 素風
朝顔に縄の梯子を絡まぐ 肥州

佳作

朝顔や夜勤戻りの看護婦が一空
朝顔の葉みし軒の濯ぎ物 白嶺
一鉢の朝顔なれどたのしめり 琥珀
朝顔やからりと晴れし窓景色 天
朝顔の蕾がぞへる月夜かな 牧村
朝顔の蔓に蔽はれし住居かな 奇月

書き方をよしとして居ります

○ 模様のある場合は色の濃き所は稍々大目に書く事

○ 生物の目、植物の花葉などにはさけて書く事

○ 上下左右の空間と相等しく認める事

五、墨生つぎ

短冊のやうに三染又は二染がよい

六、題の書き方

漢字の時は一行書

詞書の時は正しく上下を揃へて書く事

散らし書はせぬ事

七、名前の書き方

1、自詠の場合は

題のあるものは題の左下へ添える事

題のないものは歌の最後へ本文とは同大に

2、自詠でない場合は

最後へ「何某書」と書く事

3、御歌や御制は「拜書」「謹書」と書く事

書道の三筆と呼ばれてゐるのは

嵯峨帝

弘法大師

橘逸勢

であり、

三蹟といふのは

小野道風

藤原佐理

藤原行成

であります

色紙の認め方

48

溪山

一起床 色紙を初めは「色紙形」と言つたのであります
が平安時代の色紙は今日の半紙又は美濃紙のことだと
言つて居ります。

二寸法 古來種々の色紙があつたといひますが今日は
大体の寸法は左記のやうであります。

大色紙 一長サ九寸 巾 八寸

普通色紙 一長サ七寸 巾 六寸

豆色紙 一長サ三寸五分 巾 三寸

三用ひ方と上下

色紙は普通縦長に用ひます。(横長に用ふべからず)

上下は

○無地には上下なし。模様入も唐草模様と連続模様には上下なし。

○雲形、霞形 同一形式の時は空間の廣い方が上。

○青や紫の時は青を空に譬へて上とす。

○雲と霞の時は雲が上。

○砂子の時は広く大きく散らした方が上(同じ時は空間の

大きい方が上)

四書式 (古來種々の形式あり)

最近は大伴全面を巧みに征服して而も統一あり雅致ある

第三面ボストン川柳句會 八月十五日

課題「真似」 石川凡次選

天 安井 静女

ぬけめなくと真似た娘の足短かき
地 村上 彦四

見真似する子に考へる父の酒
人 花見 留雄

子の真似を叱り己の過去に觸れ
客 北村 静江

半分は手真似で母のイングリッシュ
客 富田 虎山

カクログの妻お隣の にする
客 矢形 溪山

か真似を子にはさせまい古日記
客 村上 彦四

一人手を擧ぐれば真似る一年生
花見 留雄

猪口を持つ真似も上手な児を恐れ
秀

突撃の真似が泣いてる豆兵士 時子
兄の真似して叱られる女の子 香風

51

打つ真似をして新婚は仲がよし 三水

真似られぬ顔で親父は髭を剃り春波

成金を真似た母が夜逃げをし 亜洲

泣き聲を真似ても母は母の聲 迷舟

エーノの後は手真似で用を足し 素人

姉さん真似て優しく睨まれる 兎氏

あの人が虎藏真似て見直され 楓水

新妻の母に真似たる母の数 寿美

智慧盛り今宵も兄を真似て寝る 露光

マノ事を真似てる様な新お水庭 露南

母の癖児はまゝ事へみな真似 牧東

まゝ事が母の聲色も真似てゐる 静江

佳作

真似られて叱られもせぬ父の過去 絹子

真似一ツが智慧に育ちゆき 離羊

まゝ事へ母を真似てる國訛り 時子

まゝ事へそぶり其儘小さい母 如骨

逃げた魚語る手真似へ子の真顔 春波

復寫してどこかに個性ぬけてゐる 一沙

料野欄通りを真似て出来不出来 鏡水

盆踊真似た手振が逆に向き 兎氏

悪友の真似か氣になる出所の息子 まつる

お別れに臨みまして

50

富田 虎山

石川先生の御歸國で多大忙を極めて居ります只今文懐一周
年記念編輯を前に控へて本日出所する事を大変心苦しく思ひ
ます、ツレーキへ行かれる筈だつた凡戈先生、まだ一ヶ
月二ヶ月大丈夫にゐらつしやる心算で私もかねて出所を希
望して居りました處、今面々ハヨー州に仕事を見付まして、溪山
凡戈西先生了解のもとに出所の手續を漸やく完了しました
とたんに凡戈先生の御歸國となりまして私共少なからず面く
らつた次第です、あとの事は心配すなと鼓勵して下さる溪山
先生、先生の汗みどろの姿へ心を痛めつゝ、不本意ながら出所
する事に致しました、
川柳を殷へて頂いた溪山凡戈西先生並に皆々様から随分可愛
がつて頂きました事は終生忘れ難い感激であります、色々と
失禮致して居りますが、右の様な次第御了承を願ひます、
再會の日を確く信じてお別れを申し上げます、勝手な事を申す
様で御座います、どうか皆々様此文藝會、ポストン文藝誌
をあくまで御支援御助力下さる様、一層にお願致します、終りに
臨みまして皆々様の御健康を切に御祈り申上ります、

ポストン文藝會御一同様

世界戦余波しみてと荷を纏め

一九四三、八、二六、

第廿四回ホスト文協川柳句會

題「轉住処の種々相」矢形溪山選

天

菅野聖水

森の中聖歌へまじる蟬の声

地

清水迷舟

ニターニ無事で帰水た石の艶

人

吉里竜耳

諦めた心を揺る交換船

客

竹原白雀

何処までも行きます不忠胆の底

客

紫水

忍従と別に試練の皮膚の色

客

塩出大洲

忠不忠氣持を他処にまめられる

客

小田原

風次第布令も変る自治制下

客

村上彦四

探照燈光の三人を照し過ぐ

秀

三度飯貰ふ仰ぐ明日の空

秀

王園

足りし日の思ひはこもる十九番

秀

王園

若いのがみな出て行く灯を凝視め

素人

曲線美目につく程の暑さなり

楓水

蚊や火をくぐりてシワの行きもどろ

子守

アガテカ今も歩哨の前を行き

露白

一年を飯へた皮膚に陽の直射

大海

男意地いといまのペニの先

白露

我家の気持で帰るギョウの灯

如

松声の音頭で揃ふ踊の環

丘

登録のサインが分ける西東木

霞

はつきりと三世目さめれた木に伝ち

守平

雨心地事と加州を語り合ひ

聖水

青葉蔭去るの音と語り合ひ

大海

同じ月照し故郷の金踊り

汀村

二月の出所見送る人の数

迷舟

娘は外に母は眠れぬ夜をこち

考

肌ぬがう一室睦まじ夕涼

深泉

所外して新妻ふた娘の真実

白舟

佳

本降りになぞ解けゆく人の波

里江

忠不忠何れも同じ祖先からう

晴江

主婦の顔見直す卓の池の坊

五松

肩書も只黙々と血洗ひ

胡仙

佳作

真似てゐる自分の癖へ子を吐り 三木

軸

真似の上手な男口が過ぎ

應募 百五十句
入選 九十九句

席題 煙 互選 入真順

あゝあたり開眼してゐる黒煙 虎山
かあやんがけむたく見えるや九 牧東
発車ベル残す煙にある未練 幽香
土煙静まる宵の小糖雨 里江
轉住所煙の様なデマの救 凡戈
孟法會香の煙に思ふ亡母 胡仙
禁煙へと果になる煙まだ残り 如骨
一ト包煙に吹いて今日もくれ 次彦
雲煙の彼方故郷へ續く空 全
責任を問はれて外づす煙の輪 溪山
難題へ一フクつける詰將棋 緑泉
昨晩の夢へ思案をする煙草 凡戈
將棋吹いた煙を派手に見せ 幽香

蚊いぶしにニエースを語る京台、胡仙
閑め切った煙草の煙を吐られる、虎山
煙の輪吹いた返事がにぶるなり、龍耳
場つなぎを煙草へ吐ける詰下手、牧東
釣歸り急ぐは遠いメスの煙 溪山
炎天にかゝはりなくメスの煙 虎山
噂した男煙の様に消え 凡戈
人柱香の煙の絶間なく 緑泉
一節の川を隔てゝ立つ煙 龍耳
エスノを柵が隔てるバスの煙 溪山
罷められぬ煙草にむせて悔むなせ、次彦
得意顔煙輪に吹く巻煙草、河村
飛行機の文字は、消え、消え、消え、如骨
メスボールいづこも同じ煙立て 里江
立つ煙メスで生き行く十二万 河村

出席者 次彦、緑泉、胡仙、
幽香、如骨、龍耳、牧東、虎山
素人、里江、春波、凡戈、溪山
於 四十六ズク、メスボール

ホストン川柳紙上互愛 第三回句交

課題「時代」

天 水畑素人

縁談へ時代違水の母にされ 石川凡才

地 華やかな時代を秘めた古稀の鏡 野田鏡水

人 苦子した時代もあつた廻り様子

客 虫干へ乙女時代ををつかしみ

金盛の時代を偲ぶ金時計 里江

親と子の仲を時代が押し隔て 五松

子の玩具時代に添ひて戦時色 紫水

老て子に買ひ着く時代の幸に居る 芳四

親と子ハ縁と縁方であつた時代 秋月

独立の音は白人時代の差をなげき 三木

来るべき時代の花は胸に秘め きぬ子

青春の時代を語る壁の額 里江

金盛の時代語らう春を林火き 栗路角

新時代築く犠牲の土万 まつ子

スピードの時代世界を狭く見る 胡仙

金盛の時代を偲ぶ轉住地

新しい時代に伸びる一休み

それだけ時代が時代の唄が聴こ

轉住も何時か過去への移民悲話

味気なき時代もあつた長い過去

しつかりと受難時代の肚を煮め

時代劇母の涙へ娘は泣けず

金持加金で買へる切符制

産声も高く時代の子が生水

襲て来る時代に試す今日の汗

流れゆく過去を見つけた黒真帖

時代にはそぐはぬ髪を切り惜み

十三万時代の犠牲に今を生き

アルバムに時代を笑ふ海水着

佳作

苦勞した時代に觸れた子の背犬

開拓へ親子時代を換へて立ち

皮膚の色時代に映る市民権

移民史の時代をくぐる轉住所

新時代国の彼岸に見る曙光

飛行機の時代となつた空の色

きぬ子

宇平

如骨

留雄

秋月

柳華

光榮

迷舟

留雄

まつ子

一沙

大海

牧東

一沙

素人

芳四

露角

高羊

莊月

西水

里江

帰國する人を羨む老いた母
 野球戦員贖員々々の声をあげ
 隔離する活へ殖える日本行
 戦局が明日の吾が身を決める
 又デマと知れど寂しき夜となり
 フアボんをスエ越えて出られたい
 去年とは違ふキャンアの飯の味
 月給の高にはふれず日々汗
 振袖も下駄も嬉しい盆踊
 父帰る日へ待遠く指ををり
 国策へ階眠を覺す声明書
 日につるなまける癖へ子の末末
 戦等また移動するなり徳る秋
 給料を忘れ奉仕の汗を拭き
 にかかにアセモの活きワの中
 減員の布令に皆がよく稼ぎ
 討議まだ続く既所のミナミダ
 次々に手習追おて今日も暮水
 肥ったう瘦せたり夏のメスライ
 志願する兵を賣む人そしる人
 戦争は何処か音頭の娘の手振
 押出して相撲互角の土俵際
 應募句百七十四 入選 五十四

里江 里江 眉山 紫水 大洲 兔氏 王園 鏡水 鏡水 鏡水 露光 露光 晴江 晴江 静枝 高羊 枯木 枯木 迷舟 泣水 泣水 丘上

54

軸
 残されて旅愁を綴る輪轉機

第百七十四回火曜会作品

題「踊」 悠し

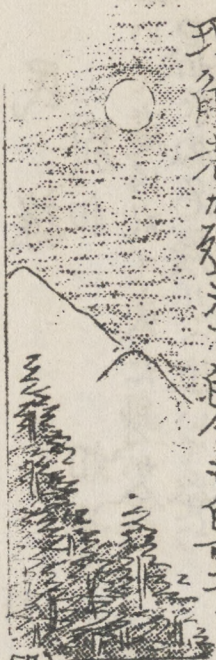
振袖の足にまつける盆踊
 しゴドに合せて踊る娘の手振り
 踊見にきて人波を覚えて戻る
 踊り子に招かれて居る丸い月
 踊りの裾が気になる砂埃う
 戦乱と衆所にお寺の盆踊
 踊り輪 更けてだん 小さき
 初春の母も一語に出て踊り
 春の足踊るこ女に花が散る
 観客とこうとりさせる踊の手
 者二式だえになつて母は去り
 チト多いつり銭貰て考へる
 小ホケな悠に迷つた過去を取ち
 悠張つて寄せた化石を持て余し
 過去の日に悠で運んだ板の数
 みどり子に母独占の欲心が出来
 寄附金の話になつて妻を呼び
 友白髪悠を離水たす詣り
 俗界の悠から離水と穴子の星

里江 凡才 次彦 香月 秋骨 牧東 時子 昭女 溪山 次彦 時子 湖月 谷凡 昭女 光葉 緑泉 溪山

4 つましく名に並ぶ對の下駄五松
 4 お隣齊まなひ低い下駄の音 汀村
 踏みしめる下駄ひとつそりと寝静り素人
 被服料下駄で補い子澤山 光葉
 4 エース靴と下駄との別れ道 光葉
 4 白人へ下駄が取りもつ日本趣味太湖
 4 シヤフ歸り流行唄に下駄の音里江
 4 收容所下駄もなつかし古郷の音白雀
 4 今日も亦下駄が揃ふた涼台 全
 4 下駄はいて微笑む子等の風 小原
 4 下駄の音聞けばなつかし故郷の夜 時子

雑詠 市川土偶

い走りの懐にきけは忘れもの
 施肥法の自慢も出たり加子の出来
 自慢したカラシネ虫にしてやられ
 理解者が殖えて自分も自棄する



(57)

お断り

ポストン文執云一周年記念
 発刊は石川富田西氏の出發と
 時を同じうして半ば送別号と
 変った感もあるが、何れを次
 号に延ばすわけにも行かぬ、
 小生の心境で、かうした事が
 一周年の「史」を作るものとして
 九月号を纏めて見ました。
 結局一周年記念と石川
 富田西君に関する寄稿其
 他を一部割愛した事は、ペー
 ジに限りある本誌として止む
 を得ざる事とは云へ残念に存
 じます。
 何れ機会ある毎にそれ等を順
 を送いて發表したいと思つて居
 ます。何卒寄稿家諸君の御
 寛恕あらん事を願ふ次第で
 あります。
 溪山

ポストン川柳第四回紙上互選

課題「下駄」

得案

入美順

7 7 7 7 8 9 9 9 9 9 9 10 12 14 14 15
 一日の勢がすんだ下駄の音
 父さんの下駄へちやな足が乗り
 湯上りの白を乗せて下駄の音
 湯上りの下駄が立よる将棋盤
 迷信を知つて気になる切な鼻緒
 不平とは別な館府の下駄の音
 風を降り下駄が出会つた立話
 下駄の出る器用にして頼まれる
 踊り子の先頭は可愛い下駄である
 姉妹母にはわかる下駄の音
 風を降り虫の音とめる下駄の音
 此風は天下御免の下駄の音
 夜遊びが更けて思はず下駄の音
 下駄はいて兄より高い兄の機嫌
 一足は記念の下駄に荷をまとも
 下駄の音させて風雲外に住み
 親の下駄穿いた幼児の得意顔
 時局談はずむ芝下駄が寄り

虎山 丘止 露角 鏡水 露光 玉園 立上 虎山 鏡水 溪山 谷風 紫水 絹子 凡才 迷舟 彦四 竜耳 守平

56

4 4 4 5 5 5 5 5 5 6 6 6 6 6 6 6 6 6 7
 統制へ下駄が補ふ靴の底
 下駄穿て故郷徳が良月夜
 下駄の縛の切れた外出の手を案じ
 靴の子が何時か下駄にも穿き慣れる
 復め過ぎた手製下駄に笑ひ合ひ
 涼台下駄に浴衣で月を覆め
 下駄の歯も減つて轉任一年目
 門口で見慣れた下駄へ客と知り
 ポストンの史蹟へシカと下駄の跡
 より下駄が出ると日本昔はしなう
 下駄音故郷懐かし夏祭
 下駄はけば日本人の音がする
 國策の線をかたがと歩く下駄
 イタンの土産嬉しい子等下駄
 湯上りはやはり下駄の履き心地
 子供まで下駄履き慣れた新開地
 日本に育つて下駄の履き心地
 統制へ殖えた配処の下駄の音
 風を降り夫の自慢を下駄に見せ
 シヤワの口思ひく下駄の型
 日本から下駄商賣かなと思ひ
 統制の靴とは別を下駄の音

應幕百七十三句

以下略

五洲 考四 胡仙 紫水 巴水 牧東 迷舟 如骨 亞洲 三本 小原 凡才 留雄 枯木 三本 守草 素人 枯木 壽美 露角 露角 巴水

朝平度 書百の五度々々度 一九四三、九三、

編輯部屋

晝夜兼行



過去二年間共に机を圍み共に
ポストンの埃の中を歩いた凡戈は西
に虎山は東に去つて、まだ暑さいア
リゾナの一角河畔轉住地の文藝編
輯室は秋風落葉の感じである。
一年記念号原稿を山積して責任
を問はれながら亡蛇式に作りあ
げたのが足一、種々な桌に於
て諸氏の意に充たぬものもあるで
あらうが、せめて私の汗に免じて
お宥しを願ひます。

一周年に當り諸方面から親切な
お手紙を戴いて此仕事の續行を強
く感ぜられる發表したい書信が多い
紙面が許さぬのを遺憾に思ふ
思ひ起す一年前くづ板を集めて机
を作り腰料を作り文藝会と

銘打つて出ても山々のか河のも
のか、がわからなかつた當時、誠
に今昔の感に堪えぬものがある、
此の間不斷の好意と支持を賜つ
た諸君の顔が今睨に輝いて嬉し
涙にくれるものがあります。

凡戈はヒフより虎山はシンシナチより
音信があつて、諸君へ宣敷の傳言で
あります。西氏の前途多幸を切に祈る、
短歌會は前回よりも出席多数
毎度永瀬氏の熱心な批評には頭が
下る。全趣味のニク々は出来得るだけ出席
して聴講されん事を待にお望め致します。
かねて婦人會の御依頼であるサン
タレー慰問短歌は野田夏泉氏、
川柳は田中松香の麗筆によりて完成
美事の出来栄えを見たい方は一
度婦人會事務所川原史人を訪ねられ
ては如何、ツルギー再轉住も十月に始
まり、壇から森すみ子、篠織謙久宮村
一雄の諸氏、柳壇から山田如月、水畑
素人のスターを失ふ事は甚だせぬ

民謡

別れ

如骨

泣いて追はれて来た身が今
盡きぬ名残りへ泣いて発つ

人情嬉しうて別れへむせふ
思や何時また逢へる人

今度逢ふ時櫻の國で
富士に抱かれて青嵐

胡仙

消えてはかないアノ思ひ出も
君の写真でしみく

苦學十年肩書もちて
今ぢや自慢の血洗ひ

君が夢さめてはかないアノ真夜中に
月が冷たく窓を射す

清く流れるコロラド河に
映す二人の水鏡

文藝投稿歓迎

創作、詩、隨筆、民謡、薈
毎月廿五日締切

俳句雜詠 毎月廿五日締切

短歌(五首以内) 全廿日締切

川柳課題 予告

課題「これから」三句 互選
誤解「三句紙上互選」
九月廿五日ノ切

課題「同林」三句 互選
十月六日ノ切

課題「色」三句 潮風選
進む「三句紙上互選」
十月廿日ノ切

初歩添削講座 潮風
題「姿」一句

各地の文藝協会

モリス文藝同人

楠瀬正美

309 POSTON, ARIZONA

クロウ文藝協会

山中桂南

31-12-C. JEROME, ARK.

川柳朗和吟社

國次史朗

11-3-F. McGEHEE, ARK

ハルカ吟社

野間一沙

6-10-D HUNT, IDAHO

ハートマン吟社

三原岩义知

15-24-C HEART MT.
WYOMING

マンザナ文藝協会

宮地青雲

6-3-3 MANZANAR, CALF.

ポスター文藝協会

矢形溪山

46-13-C POSTON, ARIZONA

名残りであります。

サンタエー收容所の火洲、白津
定吉、無聲、雀喜諸氏と再び
趣味に交る機会が到来して紙上
に相見える事は近來の快事であ
る、更に一日も早く膝を交へて昔
を語る時の到らんを切に祈る。

本誌短歌の投稿は毎月廿日
まで、川柳は月二回それ

期日を發表致します。これ以外
の作品、俳句、創作、詩、隨筆

文、民話、其他は今後毎月廿
日編輯室に届くやうに

人員不足につき、締切の嚴守を
お願い致します。

尚原稿には雅号と別に住所
姓名をはつきり認められるやう
に雅号、匿名の爲め書信が返戻
される例が余りに多いです。

本名の紙上發表は御希望に沿ひ
發表しません。

課題祝詠等は一種毎に別

紙に姓名をお認め下さる様に
尚毎回四ページ以上の掲載は紙面
が許しませんから連續ものゝ外
は此点考慮をして頂きたいです。
各轉住地の方と所外の方とよ
リドシ、御投稿を賜るやうに

希望致します。

俳壇の編輯、和氣湖月氏に急
の御願ひして済みませんでした。

次面からは稍々秩序立つたプ
ログラムで進む事が出来ると存じ
ます。

本誌刊行に當り特に石原慈
禎師、倉橋智蔵師、永瀬勇氏
久留島氏の大きな援助を賜つ
た事を本誌會を代表してお禮
を申し上げます。

尚寄稿者諸氏の労を謝して
筆を擱きます。

お断りページの都合上残りの原稿
は十月号に譲ります。溪山

POSTON POETRY
CLUB
BLOCK-46

ポ
ス
ト
ン
文
藝
倶
楽
會

ブ
ラ
ッ
ク
四
十
六
区
ホ
ー
ル

一
九
四
三
年
九
月
十
日
發
行